

森(毛利)吉安と

徳川氏三代の位牌

宮下 良明

(会員 佐伯市古江区)

はじめに

西光庵の所在地は堅田混谷区、正明寺に隣接し現在無
住庵となっている。

須弥壇すみだんの中央が阿弥陀如来、左右に薬師・観音の各佛
が並び、前庭の御堂に高さ三尺余の観音菩薩が安置さ
れ、往時の面影が偲ばれる。

去る平成五年五月発行の佐伯市報「歴史散歩」で、佐
藤巧氏が当庵のことを詳しく書いている。

庵には壇上の一隅に徳川氏三代の位牌と、住職の位牌
が安置されているが、その経緯いきまつは誰も分かっていない。
次の拓本が問題の三代位牌である。

(一) 徳川幕府初代 家康



(二) 同 二代 秀忠



(三) 同 三代 家光



以上は葵紋あおいでそれと分かる。

では何故このような位牌が当庵に祭られているのであ
ろうか。また、何時頃誰によって供養が営まれたもの
か、その疑問を知る者は二人の住職と思われるが、最早
聞き正す術はない。

(一) 初代 住職



(二) 中興 住職



右の住職位牌と徳川家の関連は後述したい。本編は堅

田・床木を合わせて「二千石」を領した森吉安が、佐伯領主毛利高政より分地されたという定説が果たして真相か否か、さらにまた吉安と徳川氏との関係、幕府に返上した理由は何かなど、吉安を中心に天領二千石領有の経

緯を詳論してみたいと思う。

いずれにせよ江戸時代を通じ幕末まで、堅田・床木が一部を除いて幕府直轄領(天領)であった事實は、今更申上げるまでもない。

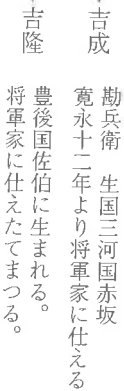
しかし、初期領有者(慶長年中)吉安の事跡に関する裏付け史料に、確認するものはほとんどない。ただ、吉安を偲び後世になって造立された供養墓が、柏江区江国寺墓地にあるが、総体的には謎に近い人物のように思われる。

次に寛永十九年(一六四三)毛利家が幕府に提出した系図から、吉安と徳川三代との整合性をみたいと思う。

高尙公御代(毛利三代寛永十二〜寛文五)被差出候系譜写
政次―高次―高政―高成

生国尾張、幼少より秀吉に仕え後大権現に謁し奉る、台徳院殿、および將軍家につかえる寛永十七年四月一日六十八才にて死す 法名、宗才

「吉安」



右の系図は写とあるので真偽の程はともかく、吉安没

年前後のものだけに、吉安家譜に限り真憑性は高いものと思う。その内容から次ぎの関係を窺^{うかが}い知ることができると思う。

一、吉安と徳川幕府の関係

系図には吉安の長男吉成の生国は三河国赤坂とある。中世の赤坂は石清水八幡宮の莊園として見えるが、永禄三年(一五六〇)桶狭間の戦いで今川氏が滅亡した後、織田信長の助力を得た家康は三河一國を平定した。これは莊園制の終末期に当たる。

元来三河は徳川氏の本拠地であったが、家康が平定した後の文禄から慶長期にかけ、吉安は徳川氏の膝元(赤坂)に居住していたことが、長男吉成の出自で分かるものと思う。

余談になるが佐伯毛利家に預けられ、善教寺の地で没した信州松本城主石川康長も、本来三河武士の流れ、吉安とは並々ならぬ交友関係にあったものようである。さらに吉安親子は、三代の將軍家に仕えたところがあるが、その実は元々三河武士の流れではなかったかという疑問も残る。ともかく三河居住以来徳川氏と通じていたことを物語っている。

こうしたことから、徳川氏三代の位牌が西光庵に祭られていることにより、吉安との繋^{つな}がりの深さを示す一つの証^{あかし}になるものと考えられる。

一、分地説について

高政により堅田・床木二千石を吉安に分地したという説は、これまで史書等により論証されてきた。しかし、今少し掘り下げてみたいと思う。

分地とは土地と支配権を分け与える事と思うが、高政が果たして分け与えたものなのか、極めて曖昧^{あいまい}な点^あが感じられる。

そこで分地説の論拠に基づいて物証となるものを見て見ると、次の発給者不明とされる宛行状^{あていざう}が発端であったことが分かる。それは、

豊後国日田郡之内、高式万石令^{せしめ}附所^{おわんぬ}畢、

千石者父九郎左衛門、二千石者弟権六江

令^し配分^{くわいぶん}、残^{のこ}壹万七千石之軍役可領地^{くわんち}者也

文禄四未年九月日

毛利民部大輔殿

以上、温故知新録(一) 三三〇頁所集

これを信ずるか信じないかは自由と思うが、筆者はあまり信ずるに足る文書ではないと考えている。橋本操六氏(大分大学講師)も偽文書の可能性を指摘している。つまり右の文章が基で、吉安分地説が成立し今日に至っているのである。

一、吉安の知行について考察

知行とは領土の占有権のことで、権力者が服従者に与えることに用いる文言をいう、知行権を与えられた者を知行主という(史書)。分地と知行とは解釈が少し違う様である。

次に史料を掲げて吉安の知行に対する問題点を論じてみたい。

大分県史料(37) 慶長拾年七月 三〇二頁

玖珠 御藏入

日田 郡之内 知行分 高目録

海士郡

高四萬五千九百七十七石八斗六升七合

田数合式千式百四町壹段八畝拾四歩

畠数合式千五百式十五町四段壹畝式歩

物成合壹万千式百六十壹石一斗九升七合七勺

六才

右高之内(賦縣群之内)

一、高式萬六千九百七十七石八斗六升一合

御代官所

物成七千式百七十七石七斗八升五合七才

一、高一万九千石 海士郡 郡之内

毛利伊勢守 知行

物成三千九百九十石四斗壹升式合七勺九才

一、高式千石 毛利九郎左衛門 知行

右の内容をみると御検地帳とあることから、幕府承認の目録と思われる。したがって、吉安の知行二千石は公儀より遣わされたものと考えられる。

このように徳川初期には各大名家に対し、所領地内に幕府領とか他国領を目付役の目的で置いた政策の一環でもあった。類例は多いと学者は云う。その最たるものに加賀百万石の内、後に天領となった土方領(ひしかた)一万石が上げられる。「網野善彦・森浩一対談より」

いづれにせよ監視のため、楔(くわぎ)を打つ事は徳川幕府が用いた常套手段であったと考えられる。

一、天領の石高

天保四年天領地田畑高及反別取調帳

「汐月三代吉編集」引用

一、高四百拾壹石三斗九合

床木村

一、高百貳拾五石貳斗貳升

塩月村

一、高百五拾四石壹斗九升七合

西野村

一、高七拾七石九斗五升

府坂村

一、高七拾貳石五斗九升

棚野村

一、高百三拾五石八斗八升八合

石打村

一、高百四拾九石八斗貳升貳合

波越村

一、高三百八拾壹石八斗七升八合

泥谷村

一、高貳百七拾四石七斗四升壹合

津志河内

一、高三百貳拾六石五斗六升七合

柏江村

右之寄高貳千百拾石壹斗六升貳合

十ヶ村

以上天保年中の天領石高を記した。吉安時代の二千石より少し多いが、新田畑開墾が進んでいたものと思われる。

さて、吉安の居館は右十ヶ村のうち何れかに構えていたものと推測されるが、確定する土地は見当たらない。

ただ柏江区の岩田正義老によれば、江国寺が居館の歴跡と云う。口伝なので何んとも言えないが一応候補地とし

て上げ、もつとも真憑性の高い場所として、泥谷地域を上げることができる。

泥谷は天領堅田の略中央（は）に在り、床木に次ぎ石数も高い、上城区に泥谷口なる地名がある、これは天領役所が泥谷に有った事の証左で、その入口に付けた道標（ま）と考えられる。

一、西光庵と位牌の関係

西光庵は現在江国寺（禪宗）の末庵と聞ぐが、以前は浄土宗に属していたものと思われる。理由は前記住職の位牌が知恩院を本山とする浄土宗共通の法名であり、徳川家の菩提寺浄土宗芝増上寺と照合してみれば、その辺の關係が分かる。その外住職の法名には当院とあり、当時格式の高さをも想像される。

徳川氏三代の位牌と森吉安の關係、さらに西光院が果たした役割、それ等を総合してみると、天領二千石の姿が少しずつ分ってくるものと思う。

一、森吉安の経歴

経歴については御検地帳、寛永系図以外確証する史料

は目に留まっていない。

豊臣秀吉対毛利輝元戦の人質説、朝鮮の役日田城代番説等は後世の作為と思われるので取り上げないことにした。

寛政十二年(一八〇〇)に作成された吉安の系譜(温故知新録(一)四七二頁)には、前掲の寛永系図上の長男吉成の名は見当らない。さらに幕府の問いにも曖昧な答で説得力に欠ける。

吉安の遺骸は武州日暮里南泉寺に葬ったとなつてゐる。江国寺の墓地にも、吉安の徳を偲んで柏江の人々が造立したと石田老は言う。次の拓本がその墓碑戎名である。



の一人、森兵橋重政の系譜は岡山県通史に詳しいが、吉安と混同されてきた資料は見直さねばならない問題と考える。

最近、大分県先哲史料館研究紀要第三号「中野等教授論文」では、高政の日田代官当時に関連する新たな問題が指摘されている。

吉安を知る為にも、高政・兵橋・友重の豊後に於ける一連の事跡を知らねばならない。

本編は堅田・床木二千石を領した森吉安が、兄高政より分地されたという通説に対する異説、また、徳川氏三代の位牌と吉安の関係、さらに幕府返上の経緯等の問題を中心に展望してみた。しかし、吉安の全体像は史料不足の為確認するに至らなかった。能力の限界を痛感する次第です。

【参考史料】

大分県史料(37)

温故知新録(一)

先哲史料館研究紀要第三号

「中野等」

これまで度々史談で発表してきた豊臣秀吉の馬廻り役

天領地田畑及反別取調帳「汐月三代吉」